

男
71
女
81

60

歌集

和歌

明治十七年前の歌ども

梅

梅花すきかてにのみ見る人のそ^てには香をも惜まさりけり

山家梅盛

人とはぬわか山里もこの囀は梅のさかりになりけるかな

柳

あさな〜霞かくれは立いて、柳の錦織るか佐保姫

若葉

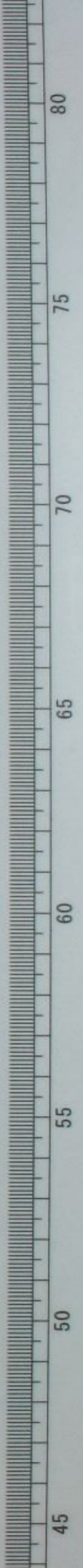
つく〜と山の若葉をなむれは同じ縁のいろそすくなき

故郷春草

野となりしわか子るさとは若草の色より外の春なかりけり

東京専門学校原稿紙

此注の却は一教也
け見事と
十四行と十六行
とに
高行
あき
見



雉子

山陰のこみちをゆけば散花のふききのうちほききす鳴くたう

或年の夏備前^岡山より備中高梁へゆく途

はて茶亭に憩へる折しも驟雨降る来ぬ

山本のしつが瓜生に音たて、すきゆく雨えす、しかりける

螢

ゆかやとは野川の水に近ければ窓のうしろも飛ぶ螢かな

山多落葉

散はてし峯の紅葉はしつがやの垣根くはのてりけるかな

旅

山を越え水をわたりにてふるさは雲のよそにもたうにけるかな

ロングフェルロー作イガアンヂェリンを讀

みてミシシッポの河のしま陰はイガアン

左リンの舟かゝりし飛て年圓たつぬる

敬無

Handwritten notes in red ink, including the characters '敬無' and other illegible text.

4

○明治十七年より同二十二年に至る

明治十七年六月同志社英學校神學科を卒

業し同級生と鴨川のほとりなる或會席に

昔別のむしろを開く其折よめる

さらばとて立わかれゆく五千鳥いつこの空にあはんとすらむ

故郷に歸らんとして高御を立出つ汽車の中

はて

立歸りいつかは見らん五月雨の空は海えゆく大いへの山

五月雨の空と共に大比叟の峰をばなれぬわがてゝろむな

船より備前國三番ゆはと云ふとるは上

る

たまに歸り来つれば故郷の言の葉草もめつらしきかな

Handwritten notes in vertical columns on the right page, including the name 'Mitsunobu' and other illegible characters.

家は歸うつく

歸りぬといふよりさきにてほる、は言葉にあまる涙なうけり

瑞州赤徳の戒趾を訪ふ昔の跡とししいふ

べきは唯松の木立のみ

なうしせをつたくて、ろか葛がつらふり はし松の枝はかゝれる

しげ山村なる熊澤菖山の跡を訪ふ

しけりあふ青葉をわけてしげ山のわかしの跡をたどるけふかた

又のうら

菖山の青葉か中らわけ入れは昔はかへる心地こそすれ

兒嶋の田の口はて

遠近の島のかりよりくれそめて袂す、しき浦風を吹く

田の口を出て、琴の浦といふところ

行 はく琴の瀬といふあり

瀬の音はしらへあはせてきこゆなり松はふきなつ琴の浦風

○陽明十一年... 瑞州赤徳の戒趾を訪ふ昔の跡とししいふ

○陽明十一年... 瑞州赤徳の戒趾を訪ふ昔の跡とししいふ

一十の心は... (faint handwriting)

しつと花を... (faint handwriting)

あつしから... (faint handwriting)

くまの... (faint handwriting)

藤戸村... (faint handwriting)

朝の... (faint handwriting)

朝の... (faint handwriting)

藤戸村はいたる佐々木盛綱のゆたりきと

いふところ今は田歌とちれり

つく／＼と遠き昔そしのはる、稲葉の波のたちも騒げは

明治十七年秋東京に上る西の都なる友は

又つかはすとして其奥に

獨のみ書ふも窓ほとふ月のさびしき影をしらせてしかは

十向井の梅見にゆく多摩川の渡はて

梅の香をのせてそ風は吹き来なる川のあななやこもかおの里

いたく風の吹きける日市街をゆく／＼

吹風に立舞ふ塵の世の中は月を開ちてそゆくへかちけれ

花見はものして

咲花にうかれ共はあそふ日はしるも讀らぬも親しかちけり

春 夕

咲花にうかれし里の夕烟なむくも春の姿ちけり

清
秋の月

秋の月を照らす雲の影は水にうつりて
空はありけり

鳥のゆく雲のなごみ影みれば水の底にも空はありけり

池

池のほとりにて
神のためいくさする身は世の中のよろいかふともたのまさりけり

春は訪ひ夏秋冬は遊へともあえふたひくおもしろきかな

傳道師はおくりける

秋の月

秋の月を照らす雲の影は水にうつりて
空はありけり

親しき友の文を得て

おつかき君か玉章はまじりて得らるるこそをかく筆もかな

夕夜

夜もすから水やの板戸をもちる風は手枕さむき冬は来にけり

折にふれたる

さよあらし梅はあると音きけは水にぬれはかき真くそありける

入道... 志は... 計... 中... 女... 之... 本... 命... 之... 命... 之... 命...

小

此... 長... 之... 命... 之... 命... 之... 命...

心... 之... 命... 之... 命... 之... 命... 之... 命...

心... 之... 命... 之... 命... 之... 命...

心... 之... 命... 之... 命... 之... 命... 之... 命...

心

一筋はおもしろい矢のやさきはかたしと思ゆるものなかりけり

ガウリヤの海邊にて彼得耶穌に従ふ圖の

賛

人をしもすなはるわさはせわはりの舟を捨て、そ知よへかゝける

落葉

如雪もいまな降り来ぬ山陰はまつ積むものは本葉はくけり

折はあはれる

改めし釣瓶のしづく落ぬまにつらゝとかはる冬は来はけり

越出て、朝髪あうふ川水のけふる頃はもなりはけるかな

書を讀み居て

遠かたは鳴くなる犬の聲すなりてよひもいたく更けはけらしな

述懐

おもひきや人の言葉の裏おもておはかりおはるものあらんとは

世の中をあなうといひて過すともうさはかはらしいはてもあらん

しら濱のしろき真砂地つはひつゝ涼みてゆかぬ夜はふくこと
折はふれたる

夏 月

月くるれば軒端にちかきゆふの本の上葉しつかは夕風を吹く
桐の葉のかへれは見ゆる月影を涼しといひてふかす夜半かな

満月のすたれこしに見ゆるかた

高とのゝをすはかゝれる月影はさながら玉のこゝちこそすれ
折にあれたる

中空はすみゆく月の光はひろき都もくまながりけり

あか／＼に木陰は袖そぬ水にける木の葉の露の雨にあれは

題よす

今はせにくちし軒端のしのすたれいくたひ月はまきやしつらん
海人が屋の軒のすたれのめをあらみもる月いかほさやけかるらん

折はふれたる

Handwritten notes on the reverse page, including a date '1914.7.21' and various vertical columns of text.

上野山夜ふかき月は来て見れば杉の梢は梟のなく

朝日

あさちの霜をくまても白雲はむすひかへたるあま日かけかな

青山は住みけるときそのあたり押あへ練

兵場になるとて家屋とも夥しくとらはら

る

昨日かもし人の住家とおもひしをみちさへわかすなりはけるかな

寄草花

築土のほとりにはさける花見ればおのつからたる色もあけけり

述懐

たどるへきその道すちは知りながらまよふ人や人のこゝろおろらん

しはらくはとまれかくまれ末途につらぬくものは誠あるけり

月は向いて

みかけとも帰るかちなるこをばあはれとおもへ秋の夜の月

Handwritten text on the reverse page, including a date '明治二十九年' and various notes.

あめつちの神のむすひし草むすひせのうき風もしかてとくらん

歌

歌

あめつちの神のむすひし草むすひせのうき風もしかてとくらん
あめつちの神のむすひし草むすひせのうき風もしかてとくらん
あめつちの神のむすひし草むすひせのうき風もしかてとくらん

あめつちの神のむすひし草むすひせのうき風もしかてとくらん

(結僧の歌を草紙といふ也)
(或書は題えたり)

おのかけをかねていつくしみける少女へ

か寫真おくるとて代うて詠めるはまた少

さかりける少女の名をモト子と云ひければ

おもとさまと詠み入れける

かくよべきものにもあらずしをへてさらはむくひんまての心そ

稚兒は問へる

垂乳巾の母か父かと尋ねればち、ほゝともは戀ひしといふなり

聖書のはしに

あまちのいのちの水を汲むときはこゝろのうちも涼しかうけり

或友の外つ國へゆくを送りて

叔卿をおもふて、あまのまをなみ浪はぬれつ、君かゆくらし

70

○明治二十二年夏より同二十四年に至る

明治二十二年八月熱海紀行の中温泉寺に至る藤原藤房卿手植の松といふあり

来て見れば君か手植のひとつ松縁はい^ましかほらさうけり

熱海の右に當りて錦岩といふありそのあな

りの海邊を錦浦といふ朝日の岩はうつよ色

となから錦を布けるかやくなやは其名あり

とそ

朝日さす錦の浦はよる波は岩にくたけて玉とてえ散れ

伊豆山村はゆくこゝらそ古々井の森といふ

杜鵑の名所也前日まよふつ、きし雨のい

また乾かす

あつたの... (faint handwritten text on the right page)

東の風吹く春の半野のこころは海にうつろひてゆく
春の風吹く春の半野のこころは海にうつろひてゆく

○陽気二十二年夏と同日二十四年五月

→

わけてゆくこゝ井の森の下露は濡れぬ秋もあらしとそおもひふ

伊豆山の社にのぼる

千早旅御山の杜の風の音は神せなからのこゝちこそすれ

熱海夕眺望

伊豆の海や初島かねに夕日さし松魚釣舟こきかへる見ゆ

一日發熱して床にありてふめる

獨のみ病の床にふすときは何とほはしに物を悲しき

こゝの名物なる稗の鮎は味いとよしとて

商人しきりにすゝむ

家つとにめせといふなる鮎よりも人の言葉のあまくそありける

歸らむとおもふは雨のみ降りつゝさけれ

は

けふも又昨日のまゝは暮にけりいつまで雨の降らむとすらん

歸るさ船のる側の船酔にて苦しきとい

小田家より送世題辭（中）
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し

此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し

此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し

此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し

此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し

此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し

此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し

此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し
 此の家の縁にたはる人々の心はなほ昔の如し

110

玉川の流の小橋わたるゆけはうしろの岡は鶯の鳴く

をほし

府中はいたる中屋といふに憇ふ

長閑なる春のこゝろを酌みかはし酔ふまであそへおもふ友とち

初 戀

いつのまは君をこひしとおもひけんわが身ながらはあやしきれつゝ

或月の夜はあめる

夕方の空にかゝれる月影しほのほかのかげはほあらし

周 茂 叔

夕立のはれはるあとの月をおいて君かこゝろを何はたとへん

追 悼

この年も花さく春はかへりしをゆきはし人のかへり来ふさぬ

折はふれたる

咲きたわむ花の陰よりきこゆたう誰かつま琴の音わにやあるうん

杙 満 開

Handwritten text on the reverse page, including a large red mark at the top and several columns of vertical writing.

あふの何れか、よる月影、こゝろのさすかたを

奥の山に

こゝろはあはれいづれか、あはれいづれか、あはれいづれか

田 家

春のあけのつゆ、あけのつゆ、あけのつゆ、あけのつゆ

あけのつゆ、あけのつゆ、あけのつゆ、あけのつゆ

三三のあけのつゆ、あけのつゆ、あけのつゆ、あけのつゆ

桃の花さける岡邊を見わたせば、うす紅の雲をか、水も

田 家 花

あけのつゆ、あけのつゆ、あけのつゆ、あけのつゆ

雨 後 月

夕立のはれなるあせの月影は、吹く風より、涼しかうけり

湯浅吉郎ぬしの婚儀を祝して

世の中は、めでたき事の何は、ぬれとなほ、^この上は、めでたからぬや

湯浅ぬしみつから詠ねたる歌は、此より世

の契を結ぶか、妹背の山の松と花とはと

ありけは、はよめ。

さらぬたは、ゆかしきものを、若松の花は、ちきりをか、けてけるかな

高野重三ぬしの婚儀の披露のむし、るは招

れて

めでたきを、何は、たてへん、鶴の齡は、たも、限りし、あはれは

秋の夕暮れに
あけぼのの光に
あざやかなる
あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ

あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ

あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ
あまのこころ
あまのこころ

明治二十五年

やうく吹く風も春はなりゆく庭前の梅
もほふと云ふほじほへは

わか宿の梅のほほひとはる風はいつれかさきは動きそめはる

野外探梅

春風のことさまり〜訪ひ来れば梅のかをらぬ里をかきけり

如月の或日友ら三人とつれなちて大森

池上のありはそゝろあるきして歸るさ

品川の海邊にて

品川の沖の白帆は夕日さし波の上遠く霞なほいく

梅林月

梅の花さける岡邊の夕暮はいつとはなしは月ほろくゆく

Handwritten notes on the reverse page, including a vertical line and various characters.



神代歌集

あはれ等の妹のしむひりおる風吹くつ水さきと静きとあはれ

しむひりおる風吹くつ水さきと静きとあはれ

あはれ等の妹のしむひりおる風吹くつ水さきと静きとあはれ

○開巻二十五平一

折に觸れて

みちわたる梅のほひは春風のつほさやおもさこの静なる

吹さおく梅のほひのりおもしや風もてふいは動きややめ

折に觸れて

あはれに書ふおもさは春にあらじ雲雀なく野はいまや遊ばん

題しらす

しむ鳩の道后かろせはうつし身のこの世のうさを何はやらなむ

恋歌

君とわかほしめて袖をおはしつゝ見し夕月のわすられなくに

きみか手をとるてもゆか人がほる夜の月はのくらき花の下道

題しらす

鶯の聲をさしるへは尋ねてよ花さく陰はいつしをれば

閑花

人とはぬわかかくれあき春くれはふえはみはらぬ花を咲きける

しほの風はさかすかすといふ
うらみはさかすかすといふ

櫻一とす

うらみはさかすかすといふ
うらみはさかすかすといふ

井のつと

うらみはさかすかすといふ
うらみはさかすかすといふ

うらみはさかすかすといふ
うらみはさかすかすといふ

井のつと

一日を遊ひくらし山邊の梅をおもひ出
て、雨の降る日によめる

わか袖を香にもそめてし梅の花け小降る雨は散りかえむらん

折に觸れたる

つねは見て過ぎし垣根の梅の花目につく程は咲にけるかな

戀歌

中き妹子かかさしの玉のたまさかにはあふこともちくねれるこの頃

述懐

右の人のいひつる言の葉をいひもたらふにわれ老ゆらんか

門田もろしつはもかもなかくしのみふみの林にまよはんよは

春曉

さめもせずぬふくもやらぬあけほのに夢かよはかり鷺鳴のたぐ

月花

月花のかくも心はしたしきはこの身のはかの我身はやあらぬ

中を練子心...
し...
...

巻 終

し...
...

...

...

...

一日...

題しらす

みなしとを打もわすれて散川末そのみこそくみもあらそへ

折はふれたる

ほのめれも花にかゝれる月影は夢のなみおるこちこそすれ

四月十日神田は大火あり十二日きか

もえつゝきて四千餘戸を灰燼となす夕暮

わけありて

見わたせて都の春をたかくける月の影さへものすてくして

香川景樹翁の五十回忌に當るとして紀念會

の催ありければ

百年の所おほしへにし世にはあれと柱の園をなほとはれつる

山年頃香川翁の名殊更に高し

君小植^ま之し言葉の花のかをらすは斯道しかはさむしからまし

香川翁の歌謠のこゝろを

天地の同じまことやしらふらん谷間の流奔の松風

春の旅にて

鶯

鶯の聲はかうなる谷陰をいねもすけふもたより来はけり

隅田川に短艇の聲漕あり

みる人のこゝたゆきかふふちきほひ堤の花も散りみたれつゝ

湯浅吉郎ぬしの文のおくは咲花も葉こし

は見ゆる吳竹の林の奥は鶯の鳴くとあり

ければ鶯の聲のみかほと滴書してかへし

す

鶯の聲もきてゆる吳竹の林のおくに琴のねえする

折はぬれぬる

おもしろき春の野みちをわけゆけは蝶やむつるゝわれやてふに

雨中聞鶯

一日たは春を惜しとや鶯は雨にぬれて花陰に鳴く

鶯の聲

四月十日隅田川に短艇の聲漕あり
湯浅吉郎ぬしの文のおくは咲花も葉こし
は見ゆる吳竹の林の奥は鶯の鳴くとあり
ければ鶯の聲のみかほと滴書してかへし
す
鶯の聲もきてゆる吳竹の林のおくに琴のねえする
折はぬれぬる
おもしろき春の野みちをわけゆけは蝶やむつるゝわれやてふに
一日たは春を惜しとや鶯は雨にぬれて花陰に鳴く

月夜の白雲竹の林の奥の響き思ふは
 風吹けは袖に裳裾に花を散らくるも春は面白きかな
 雪とふり胡蝶もふそおもしろき花は散らをもさかるといほ人
 春の訪れす
 春の訪れす
 春の訪れす
 春の訪れす

落花

雪とふり胡蝶もふそおもしろき花は散らをもさかるといほ人

暮春

もきよはし

風吹けは袖に裳裾に花を散らくるも春は面白きかな

題しらす

ひむかしの窓をあくれは豆の花さけるや道に蝶の飛ふ見ゆ

咲きには女園の一枝たまはらはわかれ海棠の花を手折らん

寄花述思

散る花を見まはくけしとやおもふらんとしへは嘆くものにしあらは

述懐

こゝにして春は見へきをいかなれはしまばぬ花の里をえこひし

未見戀

あひ見えてのころは更にはあらんおとにきくたれてひしきものを

理想

あきふも七國の一跡をまわつておぼかな哉葉のたつちをば
しつとしの波をたたく水は白のたつて下は下流の海に流るる

題しらす

風をたかぬ海に波をたたく水は白のたつて下は下流の海に流るる

暮春

あきふも七國の一跡をまわつておぼかな哉葉のたつちをば
しつとしの波をたたく水は白のたつて下は下流の海に流るる

暮春

ゆけどくしに到らぬ空をしながらもほるや人のこゝろなるらん

題しらす

さしていへは月か花か人か問ふ花と月とをさすはあうじ

五月十五日人見一太郎氏の婚儀の披露の

おしろは招けて

物換り星移りゆく世の中にこのめてたさははらさうけり

花ちりし後にも君か世の中をふたりし見れば春はやはあらぬ

花よりも妙なる花をさえずりや日頃しけくも雨の降うけ人

(左二首 兼其頃雨の降うつ、きけ水は)

八月の中頃海に流せむとて鎌倉迄子をへ

て下總國行々園はゆく其折の歌ども

浦風はかるき袂をかへしつゝ君とわかゆく由井の濱邊を

竹園のきよき渚におうたちて都の塵をいさやあらはん

たかかく水れしあらはん浦風はしまれて咲ける大和撫子

あささし けしと 雲の 中を 飛ぶ 鳥の 影は 谷の 奥に あり

あささし けしと 雲の 中を 飛ぶ 鳥の 影は 谷の 奥に あり

あささし けしと 雲の 中を 飛ぶ 鳥の 影は 谷の 奥に あり

あささし けしと 雲の 中を 飛ぶ 鳥の 影は 谷の 奥に あり

あささし けしと 雲の 中を 飛ぶ 鳥の 影は 谷の 奥に あり

あささし けしと 雲の 中を 飛ぶ 鳥の 影は 谷の 奥に あり

あささし けしと 雲の 中を 飛ぶ 鳥の 影は 谷の 奥に あり

竹ヶ岡より都へ歸らむとて途を鹿野山に

とら夏末たるはのぼるみちすから鶯^な鳴く

く

深山にはいつまで春の残るうむめくる谷々鶯の鳴く

鹿野山の巔はいつ折しも小雨ふり来ぬ

打わたす江戸の入江は見えながら峯の檜原は小雨ふるなり

雨や降る霧や小雨は立まかふふつのみさきの見えすなりゆく

或人の想像を祝いてふみてつかはしける

黒髪のしろくなるまでけふの日のこのめてたさはかはらさらなん

晩鐘

むら鳥水くらしもとむる木立よりひくも淋し入相り鐘

野夕月

栞尾花さやく野末の露のうへに夕月白くかゝりけるかな

折はふれたる

此夕阿かある際にはさそはれていつちゆくら人わか心えも

題しらす

世はさむし人はつれなし若草のつまなき君か如何にかすらん

見えぬとも

世のさむけ心のうちは事しあれは世のさむけくもわれはおもはず

西夕阿かある際にはさそはれていつちゆくら人わか心えも

世のさむけ心のうちは事しあれは世のさむけくもわれはおもはず

題しらす

此夕阿かある際にはさそはれていつちゆくら人わか心えも

題しらす

世のさむけ心のうちは事しあれは世のさむけくもわれはおもはず

世のさむけ心のうちは事しあれは世のさむけくもわれはおもはず

春雪
月影と花の
一つにともなふ
さきとわらふ
花月と花
花の影と
花の影と

明治二十六年

梅初開

吹風は衣手いまた寒き目を春はあしてもにはほふ梅かな

春日

春の目をあかしとおもふは咲花にみくかれぬまのて、乃たりけり

春夜漫歩

ほのかにも月と花との影見えてわけゆくみちも夢心地する

春月朧々

月影も花もひとつに打かすみ遠近わね物の色かな

落花

袖の上は散り来る花を心あきいそがる人か打拂ふらむ

世の中の塵はゆるぎぬわか庭も花の散るにはまかせけるかな

Handwritten notes on the reverse page, including the date '明治二十六年' and various vertical text.

春の日は紅雲しりはるかに花散るに似たり

春日

西園公の春の日の詩をよみて集むる目録

詩集

〇陽明二十六年

行末をおししれとやうつ、ちきやが袖に花の散らむ

題しらす

花ちらは風のゆくを尋ねつ、蝶と共にゆれはまよはん

あくかれし心は花の散りゆめはいづくをさして迷ひいつらん

折にふれたる

音たて、空をたあけそ梅が枝にたぐ鶯のいほもこそすれ

題しらす

来むせにはわかもしふ君は花とわれわれは胡蝶となりて尋ねん

蛙

さくら花散りて流る、山陰の小川の水に蛙あくる

折にふれたる

あくかれし心のなれははてな水や花ちき枝と蝶のまよへる

閑居春雨

しつかたらいほのうちかな春雨のふよとはすれと音もきこえす

東京専門学校原稿紙

90

観しつす

春はし、雪をばあかす花の散るは、
花の散るは、雪をばあかす花の散るは、

花見はものして

雪のこと花えちりくるや女子かつれて
立まふ袖に裳裾は

田のにもあせれし春はすみれ花と
ころせきまで咲はけぬかな

野は出て

か女子が群はましうてすみれ花袂せ
きまでわれりつみてん

見渡せば田の面もあせもすみれは
なとてろせきまで咲はけるかな

長閑にし打かすめる日小高きと
ころはの

ほりて甘いを氷はいつく
ふりともちかく風

の吹き来て袂うてかす

雲雀なく空のあなへかく
なから吹かれても身のゆくよしもかな

三篇といふ雑誌に歌をこほく
かいまとめ

て出せるに月拾ひと題して

見れとあかぬ和歌のうらわは
おくり立ちてつきせぬ月をわれし拾はん

小町へ入りし

おししましりてくる月日は

やる文の奥にすしの刻る月

新刻言時ぬり美輪園

海月の影にすくもまよふ一人

る文のまよふ

お月十八日

相見^れはこひしきまさる相見^れはつきて見まくのほしき君かな

ますらをと思ひしわれも君により戀の奴となりはけるかな

われはせは君はわきもに生れ来ぬ花は胡蝶のそひたるかごと

吉のひしりの書にわかひても君をし見ぬはさびしかりけり

題しらす

舟やうけん野にや遊はん明月の此夜をいかに君とあかさん

空輝のせは方ふはてを尋ぬれば流水落花ゆく夏しらすも

鐘のゆは諸行無常とひくともさびしくはあらす君をし見ぬは

題しらす

わかきけは心の底のこひしきをおとにたてゝも鳴く蛙かな

題しらす

ふそは見ぬ櫻と共にさきいてしやまと處女にこひそ初めたる

この秋女人谷本富か幼兒を失ひければよ

かへ送りける

母のついでに神の下遊の入胎の地獄の心せり
 母のついでに神の下遊の入胎の地獄の心せり
 母のついでに神の下遊の入胎の地獄の心せり
 母のついでに神の下遊の入胎の地獄の心せり

母のついでに神の下遊の入胎の地獄の心せり
 母のついでに神の下遊の入胎の地獄の心せり
 母のついでに神の下遊の入胎の地獄の心せり
 母のついでに神の下遊の入胎の地獄の心せり

十一月末つがたより病にかかりあくる月

さらぬたは秋の夕はさむしきをいかにか君か
 いもと見まらむ

十一月末つがたより病にかかりあくる月

の四日 醫科大學第一醫院に入り同じ月の

三十日家にあへるそのをくの歌りも

いたつきはなやめは殊にたらちねの母ある身こそうれしかうけれ

病人のつとへる家にくるしくもつむる月をかせへつゝかた

限なくわじしきものはいたつきの床にあくるをまつ夜たうけり

時のかねをいとりねさめて敷かれはあかつき遠しまなかにして

いたつきのいえむその目をひるも夜もいとつおもひはまぢわたりつゝ

寺々のつとめのかねのおとまけははやあけぬらし長きこの夜も

ほきわたるからすの聲はいわさうしての夜あけねとしるそ懐しき

ときの鐘を敷へつゝけてひとりのみ幾夜かわれはあかきつらん

遠近はかしましきまで湯氣宙のおとするきけは夜あけぬらし

鶏のこゑはきかぬとゆけ笛のいきよはよるのあくるをそしる

164

あらし
ちりも

明治二十七年

家にかへりてもおぼくねうれさうけれ

は

いどりのみねさしをれば朝からす此夜あけぬとなくえ懐しき

市はひさく品にねふりのあらませはものこがぬもをしまぬものを

いぬるがとおもへはうつ、うつ、かとおもへは夢のこ、ちてえすれ

山家閑居

やまさとは松のあらしもき、あれてこゝろはさほるものなかりけり

冬山家

あらしの葉も^{もみ}ちりも散りてあらしのみわたしき枝はふきすすきふたり

ゆか山の栗のかれ葉もちりあてゝわたしき枝はさす夕日かな

冬夕

あらしの葉もちりも散りてあらしのみわたしき枝はふきすすきふたり
ゆか山の栗のかれ葉もちりあてゝわたしき枝はさす夕日かな
あらしの葉もちりも散りてあらしのみわたしき枝はふきすすきふたり
ゆか山の栗のかれ葉もちりあてゝわたしき枝はさす夕日かな

たにらひ入眼はあふしの世にわかれつゝのうらみあふくはるかにあふくはるかに
うらみのあふくはるかにあふくはるかにあふくはるかにあふくはるかにあふくはるかに

あふくはるかにあふくはるかにあふくはるかにあふくはるかにあふくはるかに

○明治二十五年

大栂の木のまき見ゆる三日月のひかりさむけき夕まくれかな

池邊冬月

池への木立のふも葉ちりはてゝ氷をてらす冬の夜の月

朝雪

降りける雪に朝日のさすみれはちうのうきせのけしきともなし

折はふれたる

さしのほら朝日ぬたしおもしろくつもれる雪のきえゆく見れば

鎌倉懐古

いくたにか由井の浦波かへれともかへらぬものはむかしあうけり

風さむみ千とくなくねの身にそしむ由井のはまへの冬の夜の月

ありし世をともはかならんふるさとの山さむしくもいつる月かけ

いはしへの榮を月さへわすれけんそらにかゝれる影のさむしさ

ふるさとの月にしきけは湯気宙のひきわたるもさむしかりけり

ゆけ箇のおとさむしくもふるさとの月にひききてゆく車かな

早梅

春をふくむ梅のつほみは鶯のてゑをしまなて開きうめけり

春色在梅

梅

北風は雪はちれとも春の色は梅のつほみにあらはれけり

梅初開

はる立ちてうれしきもの、なほはあれとふみよむまとの梅のはつ花な

題しらす

うくいすの初音とうめのほほひとはいつれさきにか春をつくらん

探梅

なつ水来てみるそうれしき鶯もまたしらすらん梅のはつ花

折にふれたる

梅か枝は竹のはやしにうくいすのなくこゑしけくはれる比かな

一むらの竹と垣根のうめか枝にゆきつもとつ鶯のなく

うめさかぬ垣根あけれはうくいすも聲ををしらすあまかはしつ、

東京専門学校原紙

Handwritten notes on the reverse page, including a circled title and several lines of text.

梅のさかりに

遠近の竹のは

梅と鶯

梅のさかりに

梅と鶯

梅のさかりに

梅と鶯

遠近の竹のは

梅のさかりに

梅と鶯

梅のさかりに

梅のさかりに

折にふれたる

梅のさかりに

初春開花

梅のさかりに

朝霞

梅のさかりに

折にふれたる

梅のさかりに

夢者
心が
心か
心と
心と
心と

春 閑 更

思 丁 下

日

夢をまたし夢ははちしまた春のよおしくはるる月をみるは夢の入りき

おひつしち夢をあかしくはるる月をみるは夢の入りき

夢をまたし夢ははちしまた春のよおしくはるる月をみるは夢の入りき

述 懐

わひつしち夢をみすてかたかくおもふかなあやしきものは浮世なりけり

世の中

夢をふこの世のまこと夢ならはしひてもわれはさめんともしはし

ゆめならは夢のちにも見てゆかん浮世のさまのあらんかさくを

美

いつこふりもる、光あめつちをてらす月月のうるはしきかな

所はあれて

くるしめはまこと此世はくるしきをたか夢としもいひはしめけん

うきあかにうみおとされし人の子を神もはとけもしらす顔なる

鬼

あはれとして手をもそへなは鬼といへとおち恐るへきものならめやは

あゝ夕くれ雲のとくはるるを真てよめる

空輝の人の世のみとおもひしはそらにも雲のいとまなけなる

Handwritten text on the right edge of the page, partially cut off.

Handwritten text on the right side of the page.

題して

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

遊 歌

は片瀬勝越そのそみて景しきなみくは

らす

さらぬたにゆふへの月はすしきを磯のまつはら風わたるなり

月影のひまなく波にくれは光をよみてゆくこちある

すしさをそてはたへて中粒はらゆきつもとくつ月をみるかな

あらいそはものすそぬれて訪いくれはまつはらかくれ琴のゆえする

池袋清風氏八月二十九日を卜して僧儀舉

けらるよししらせ越してみつからの歌

とて二首をしめさるうつせみのはかなき

せはしうれしきはしめていもを得たるな

うけり又春まぬとつけの小節は得たれと

しかしらの霜のぬかおなしの氏の新婦

は妹脊山の上流なる大船の國ふしの川の

清き川はらに死びたる五條の生水なるよ

秋の夢

明治二十八年

一月二日鎌倉に行き長谷寺にやいり五日
ばかりとどまる

此頃の夜毎の夢に入るものはほきまの千鳥峰のまつ風

秋の夜毎の夢に入るものはほきまの千鳥峰のまつ風
木佛の静けいは人方なかりりんは

しつかがる月の光にたかむれはわれもほとけはあらんとぞ

礒川の萬長にて

さくら花養生のうへに散るみれはこゝ都の春としもなし

春のうたの中に

そなた子もたちとまうてそなためけるいまをまかうの花の一本

手をとりて木かけをゆけは吾妹子のくる髪のうへは花ちるかゝる

散花をたもとはうけてサ女子の足めるや春のすかたおるらん

7 X

秋の夜毎の夢に入るものはほきまの千鳥峰のまつ風
木佛の静けいは人方なかりりんは
しつかがる月の光にたかむれはわれもほとけはあらんとぞ
礒川の萬長にて
さくら花養生のうへに散るみれはこゝ都の春としもなし
春のうたの中に
そなた子もたちとまうてそなためけるいまをまかうの花の一本
手をとりて木かけをゆけは吾妹子のくる髪のうへは花ちるかゝる
散花をたもとはうけてサ女子の足めるや春のすかたおるらん

木下...
大...
...

〇 服部二十八平

花の...

すみれ川堤の花はあけりて遠方より見るへかきける

惜花

吹風につらくも花の散る跡はふる雪よりも踏みえわつらふ

流行感冒はかゝりやゝいえたれは四月十

二日出立鎌倉遊子あたらへゆく

涙するいそやの春をきて見れば都の花はあもほさうけ

海士かや一本さくらみやてりてみる花よりめつらしきかな

みやてりはめなれし花もあまみや垣根に見ればめつらしきかな

破山は月はおすみて静にも清をあらふ遊子の浦波

葉山なる長者園は痛らんとてかしてれゆ

きけるほどかしてやとかさゝりけれは

いかはせん足はつかぬあつねてしやとはとさせう日けく水くとす

十三日朝遊子の春神亭をたち出て、金

澤へゆなくとて一里あまうも来つるに

2

しつとせや数載の昔に...
空の世を平はるまで...
二十日ふじは登らんとして須走までゆきけ

新信子遺書...
八日

編むして何をかかたみはしるしてよ請は
れけれは

人しれすみかきし玉の照らん日をあさな夕なは敷へてまたん

道の邊の草にも花はさくものを人のみあたは生れやはする

天地のしらへはわかれ高くとも澄めるこゝろはかゝはさうめや
をうくはおもひかへれお白雪のほしに車にれちわかれても

八月十六日朝はやく東京を出てれち駿州

我入道はこれく松風籠にやとる海に浴せ

くとして四日ばかりとまるあじのなかめ

いとよし

ふしのねはかゝれは空のすかたさへ世のつねあらす見えはけるかな

大空もこゝろも昔には水にけりふしの高根は雲もかゝらす

空輝の世を平はるまでふしのねにあかへる時のこゝろともかな

二十日ふじは登らんとして須走までゆきけ

道の邊の草にも花はさくものを人のみあたは生れやはする
天地のしらへはわかれ高くとも澄めるこゝろはかゝはさうめや
をうくはおもひかへれお白雪のほしに車にれちわかれても

4

Handwritten text in vertical columns on the right page, including a circled section.

〇 新體の歌

1401

新體の歌
豊原をいれ
いそぐ

新體詩

一首

片おもひ

ねてもさめても 君をのみ

おもしろろの まことをば

をさよはたまる 露ほども

くみてれぬか つれなしや

つれなき君を にくしとも

かすねのゆめの はしほに

おもひもしなほ たか／＼に

やすがるべきを むねのうち

大6
 明三十二
 車三十一
 子三十一
 紀三十一

和

しんがき
 こぼろ
 しのび

和

如原集
 春
 雨
 の
 情

れけれぬ思いのつらさをかくらん

春雨の

ふりも思ふぬに嘆きソでん

けしきのみまろはちもあり

昨日あも

閑きそめしと思ふまに

色のおせぬる花もあり

如何なる風に吹うれをか

わかふる虫にはまれてか

19



野は出づればさきさき
 雲のたふすのいづれに
 ちかしの木もたふす
 路のたふすのたふす
 知れぬ半のたふす

~~みあぐれば遠回の煙
 みたろせば千曲の流
 かゝる山かゝる水さそ
 信濃路に見る人ももろ
 はしりあけけり~~

○ 田舎の事をいふ

うれしき事の 世の中に
 何はあれど山 空の鳥の
 をあれかたあり つもとせの
 ちかしのまさを ものやあし

6号

いはへやうは
うたへやうたへ

けふの日を

せにもめてたま

まの葉の

敷のかわりをと

つくしては

いはへやうはへ

まふの日を

柿のももえ

花の袖

今年は春の

まめたまへ

おとにゆういと

おほえしは

はのちらちひの

もれぬま

聲とあつめし

うたへかし

はのめでたまぬ

星のま

しろくまのまを

かたうと

聲をよつた

うたへ

6号

6号

~~おとにゆういと
はのちらちひの
まめたまへ
うたへ~~

21

西曆千八百九十八年八月十三日
 明徳寺の跡を
 訪ひ来れば

4号

昔の跡を 訪ひ来れば

石の柱に 夕日さし

破れたる窓に 鳥啼く

いくその人や 世の中を

道れそふに 音経の

声に心を 澄しけし

苔むす床を 巾着かへり

去りもかねたる 旅人の

拂ふ裳袷に 露を散る

西曆千八百九十八年八月十三日
 明徳寺の跡を
 訪ひ来れば
 石の柱に 夕日さし
 破れたる窓に 鳥啼く
 いくその人や 世の中を
 道れそふに 音経の
 声に心を 澄しけし
 苔むす床を 巾着かへり
 去りもかねたる 旅人の
 拂ふ裳袷に 露を散る

俳句 (十九首)

春雨やつねには聞えぬ鐘の音

鶯やおもひもかりぬ木の回し

布とつめし砂利も新し梅の花

履置の靴にそへたる花一枝

散花のちろちろ回ひたる春の暮

老僧の拂かぬき散るさくら

春雨や常兵衛人もあつかりし

つもみこははあつて見つる柳のあか

山吹の庭まつあつる水の音

念佛のつれに入りたる雨の暮

静かな椿おつるも苔の上

卯の花や折るおもいとまをたける

大佛も草を見さくらかおほろ丹

凡夫もほとけの腹をさくらけり

すくすく凡も遊ゆや柳陰

梅のこぼれ
白の梅
昔の鐘
春の暮

春の暮 (五十一)

April

物家の花は... 梅の山...
 梅の花は... 梅の山...
 梅の花は... 梅の山...
 梅の花は... 梅の山...
 梅の花は... 梅の山...

梅と揮うて (十七回)

湯田川にて 短艇競争會
 のありけり

ふみきほひ 梅の花を 舞うみされ
 なく 梅と 揮うて

人の家のうらさき 見ら梅のたふ
 らよつと 須磨のふきは 奈のゆめ

